専門医症例報告

インプラントを用いて欠損歯列を修復した一症例

永田省藏

A case report of repair to a partially edentulous arch by using implants

Shozo Nagata

抄 録

症例の概要：患者は57歳・女性。下顎右側犬歯の疼痛を主訴に来院した。全顎的な重度の歯周疾患を抱え、咬合崩壊に直面していた。歯周治療を中心に、残存歯の偏在した歯列にはインプラントを用いて新たな咬合支持を獲得、不安定な下顎位をゴシックアーチ描記法により適正な位置に設定し、最終補綴を行った。

考察：術後経過においては、根面カリエスを呈したが、テレスコープ義歯の利点を活かすことで、咬合支持は良好に維持されている。

結論：残存歯が偏在した歯列に、少数のインプラントを配置して咬合を再構成した可撤性補綴はメンテナンスに優れ、予知性の高い補綴手法であった。

キーワード

欠損歯列, AGC テレスコープ, 予後の対応性, インプラント

ABSTRACT

Patient: A 57-year-old woman visited our clinic with the chief complaint of pain in the mandibular right canine. She experienced occlusal destruction (disintegration) with severe full-mouth periodontal disease. Centering on periodontal treatment, a new occlusal support was established using dental implants placed for dentitions with eccentrically-located residual teeth and the unstable mandibular position was properly positioned using the Gothic arch tracing method followed by fabrication of the final prosthesis.

Discussion: In the postoperative process, root caries were observed, but good dentitions were maintained by taking advantage of the removable prosthesis (telescopic system with auro galvano crown) during follow-up.

Conclusions: These results suggested that for dentitions with eccentrically-located residual teeth, a telescopic denture modified by placing a few dental implants would be an effective prosthesis method for maintenance and prognostic correspondence.

Key words:

Partially-edentulous dentitions, Telescopic system with AGC (auro galvano crown), Prognostic correspondence, Implant

テレスコープ内冠の取り込み・顎堤部印象

図4 Precision impression for AGC telescope
AGC テレスコープ製作のための精密印象

III. 治療内容と経過

治療は、主訴の3の疼痛については、即日に抜髄の処置を行った。その後、残存歯全体の歯周組織検査結果を説明し、病態に対する認識を持たせることから始めた。診査結果を提示し、歯周治療を行うことによって残存歯の改善を図る必要性があること、その結果次第で今後の補綴の予知性が向上することなどを説明した。処置においては、まず予後不良と診断した歯、521、124、4、235は抜去した。その後、指導を繰り返しながら、約6カ月にわたりプラークコントロールを中心とした歯周基本治療およびSRPを行い、歯周組織は徐々に改善していった。しかしながら、保存することができた残存歯の上下の対向関係は不良であった。この状況下で補綴した場合、右側に偏った咀嚼傾向が強くなり、さらに残存歯の偏在が顕著になることが予想された。対応策として、インプラントによる歯列の回復が有効な方策だと考え、3 6部へ2本のインプラントを植立した¹⁾。

補綴手法の検討では、咬合が崩壊した歯列の大部分の歯に歯冠修復の必要性があること、症例のリスクへの対策として、清掃性が良好な歯周環境、術後の歯の喪失への対応性などを考慮し、優れた2次固定を有するAGC テレスコープ義歯による欠損補綴が有効であると判断した。

残存歯の補綴前処置が終了し、支台装置の製作においては、テレスコープ内冠の印象から、2°のテーパを付与した内冠を作製し、インプラントにおいても、上部構造には同様の条件の内冠を作製した。内冠の適

図5 Gothic arch tracing of new dentures
最終補綴製作時のゴシックアーチ描記

合を確認し、それぞれを強固なバーで固定、内冠相互の位置の誤差が生じないように留意して、個人トレーにてポリエーテルラバー印象材を用いて、内冠の取り込み及び欠損部顎堤部を印象した(図4)。

咬合採得については、残存歯の偏在や偏咀嚼の傾向もあり、下顎位の診査の必要性が考えられたことから、ゴシックアーチ(Go-A)描記法を利用した。Go-Aの実際には、タッピングポイントはアベックス(Ap)の前方2mmに位置していたので、Apの位置で下顎位を決定した。また、Go-Aによる左右の側方限界運動路の長さや開きの角度などの所見からも、右咀嚼であることが理解できた(図5)。

咬合採得後、外冠の製作においては、その内面にガルバノシステムにより製作した内冠に適合する純金キャップを用いることで、良好な内外冠の適合を目指した。上顎義歯では、顎堤粘膜部の適合度を向上させる方策として、オルタードキャスト法にて、補正印象を行ったうえで、AGC テレスコープ義歯を完成させた。下顎の欠損部は、左右それぞれAGC テレスコープとした(図6, 7)。最終補綴装置に対する患者の感想は、違和感がなく、よく噛め、外冠部が外せることで清掃の容易さを強調されていた。

術後のメンテナンスについては、術前が重度の歯周病罹患歯であったことから、術後の再発を防ぐためにプラークコントロールに対する意識を減退させないように、ほぼ2カ月程度の間隔でリコールを行った。しかしながら、術後、3、3、3の根面(内冠歯肉縁)カリエスが発生したものの、術後6年経過時、根面の充填処置で対処した。一方、懸念していた歯周疾患の再発は少なく、支持の回復、左右バランスといった

図 6 Intraoral views & dental radiographs at the final prostheses
最終補綴の口腔内写真および X 線写真

力学的な面は比較的良好に維持され、インプラント対合部分への力の為害作用は発現していない。現在術後 8 年経過したが、概ね良好な経過を辿っている。

IV. 考 察

術前の上下顎残存歯の対向関係は不良であり、インプラントを適用しないと右噛みの傾向がさらに強くなり、右上犬歯と小白歯の喪失が早まることが懸念される。その結果、さらなる残存歯の偏在が上下顎で進行することが予想されたので、インプラントによる咬合再構成が必要と考えた。

V. 結 論

術後経過から、咬合支持の弱体化や残存歯の歯列内分布の不均衡が認められる症例に対しては、上下顎残存歯の対向関係や残存歯の偏在を改善するために、インプラントを植立し 2 次固定効果の高いテレスコープによる欠損補綴を行うことが、歯周疾患を抱えた歯列のメンテナンスにおいては有効と考えた。

対顎に対し強すぎない回復を心がけた

図 7 Occlusal surface views at the final prosthesis
最終補綴の咬合面観

文 献

- 1) 永田省藏. パーシャルデンチャーの術後の様相とインプラントの応用. 歯界展望 2004 ; 8 : 285-296.

著者連絡先：永田 省藏

〒 862-0924 熊本市中央区帯山 4-57-5

Tel: 096-385-1182

Fax: 096-386-1638

E-mail: s.nagata@sysken.or.jp